
バイバイ・ベイベー

よしゆきうめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バイバイ・ベイベー

【Nコード】

N8714K

【作者名】

よしゆきつめ

【あらすじ】

最高に大好きな友達が結婚することになった。一緒に暮らしたこの部屋を出て行く彼女と、残る私との最後の何日かのお話。

めぐとキヨ

「私、結婚することになった」

「え、田坂と？」

「そうだ、と言う代わりにくわえタバコのみまで譲くと、めぐは煙を深く吐いた。

「おめでとう、田坂めぐみになるんだね」

ありきたりな台詞をはしゃいで口にすれば、めぐは照れ隠しか苦そうに笑って首をかしげ私に煙草を差し出した。ありがたく受け取った瞬間に目に入った、手にしているハイライトの箱にでかかど書かれた健康への注意書きが、何だか不恰好でめぐには似合わない。

「めでたいかね」

自嘲気味に呟くめぐは、抱えた膝の先で足の指をいじっていて、まるですねた子供みたいに見える。

「いやなの？」

「いやじゃあ、ないけどさ。もちろん嬉しいけど。あたしはキヨと暮らすのに慣れてるからさ、今更ケンジと住んで上手くいくのかって思うのよ」

「マリッジブルー、早くね？」

めぐらしくないめつぽう弱気な台詞に、私はどういったらいいかわからなくて、とりあえず笑い飛ばしてみた。

まだ話には出ていないけれど、めぐが結婚するって言うことは、この家から出て行くということなのだ。

田坂がいるという時点で、いくらある程度の覚悟が出来ていたとはいえ、いきなり結婚と聞かされて私だってああそうかと納得できるほどに心が落ち着いているわけでない。

「いくよ。めぐなら。だって、多分同居人の最悪パターンの私と暮らせたんだよ？ご飯作らないし、ゴミ出し忘れるし。」

「鍵は掛けないしね」

ついさつき私が叱られた原因を口にする、めぐは漸く僅かに表情を和らげた。

しかし油断をすれば直ぐに戻ってきそうな湿った空気に、私は半ば無理やりに話題を取り繕う。

「でも、田坂の顔はチバじゃないね。」

「うん、ぜんっぜんチバじゃないけど」

やっと、めぐが声をあげて笑った。

「めぐ」こと宮下めぐみと私が出会ったのは高校一年の今頃で、入学して直ぐの桜が風に舞う季節だった。

入学して二週間、既に私のお昼休みの定位置はベランダだった。別に友達が出来なかったわけではなく、窓の外の青空に桜の花びらが舞っているのを見ると、もうどうしてか気持ちが悪く落ち着かず、ベランダに出たくてしょうがなくなるのだ。

幸い、そんな私を「おもしろい」と片付けてくれた友人ばかりだったので（後から聞いたら、悩みがあるんだと心配されていたそうなのだが）私は気にせず自由なベランダタイムを過ごすことが出来た。

私がベランダに出始めた日から、隣のクラスにも同じようにベランダで黄昏ている女子生徒がいるのは知っていた。しかし私は別段気に留めるわけでもなく、いつもイヤホンを耳に突っ込んで好きな音楽に浸っていた。

好きな音楽を聴きながら眺める景色はまるでプロモーションビデオでも見るようで気分がよくて、気をつけなければ歌い出してしまいそうだった。だから、最初にめぐに肩を叩かれたときは、自分が無意識に歌いだしていたのかと思って、随分ひやりとしたことをおぼ

えている。

「ねえ、なに聞ってるの？」

初めてしつかりと見た彼女は、私よりずっと大人っぽく見えた。当時の写真を見れば断然子供なのだけれど、そのときの私には十分懂れに値する雰囲気だった。

「・・・ユニコーン」

答えるのに、少しだけためらった。

五つ上の兄の影響で、私はいつも少し上の世代の人間が聞くようなものを聞いていたので、正直今まで話題が合う人に出会ったことがないのだ。これで彼女が「知らない」と答えたらなんと話を続けようなどと、私は妙に緊張していた。

「ああ、私も好き。どのCD？」

すぐさま返ってきた、あつさりと肩透かしを食らわせられた答えと、好きな話題が出来そうな人物の登場に、私は安心と興奮を押さえ込むように息を飲み込んだ。

「服部」

「うは、いいね。民生も聞くの？」

「民生も聞くけど・・・私はユニコーンの方が好きかな」

「私も同感。私、服部がね、一番好きかも、アルバムで。」

「私も。ジャケットも良いよね」

「うん、すっごくいい。」

めぐみはそういつて満面の笑みを浮かべると、私が外したイヤホンを片方奪い、もう片方を私の耳に突っ込み、ウォークマンを指差して私に再生を促した。

実のところ、こうして片方のイヤホンを分け合って聞くのは苦手だった。そうまでして音楽を誰かと聴きたいと思わないし、何だか拘束されている感じが好きになれないのだ。

それに好きなものは一人でじっくりと聞くほうが好きだった。だから、しゅるとかすかな音を立ててCDが回りだすのを見て私は、自分がこうして初めて話すめぐとのイヤホンの分け合いに不自由を感じていないことが不思議で、なんだかこそばゆくて仕方なかった。

その日から、私とめぐは昼休みを一緒に過ごすようになった。

最初は桜の花びらを見たいがために出たベランダで、私たちは二人で青葉を、色づいた銀杏を、そして雪をみた。

不思議と私たちが話すのは昼休みだけで、他の休み時間や帰りなど、私はめぐが何をしているのか誰といるのか知らなかったし、まあ知りたいと思ったことはあるけれど、それでも他の誰とも違うめぐとの距離が特別な気がしてそれに触れることはなかった。

その代わり、私たちの昼休みの逢引は卒業するまで続いた。

音楽以外は私たちの趣向はまるで違っていて、好きなファッションも好きな俳優もめぐは何だか落ち着いていて、私は密かにそんなめぐに憧れていた。

「ああ、チバみたいな彼氏ほしいなあ。」

「ミッシェルの？」

「うん。キヨはアベでしょ？」

「うん、アベのギターになりたい」

私のいかれた答えに、めぐは楽しそうに「うははは」と笑う。

私とめぐが揃って好きなバンドが最近発売したCDが最高に気に入ったせいで、もっぱら二人の話題はミッシェルとそのメンバーのことだった。

この頃には私は、買ったCDはめぐと最初に聞くことに決めていて、もう四代目になったイヤホンを当たり前のように分け合っていた。なぜ四代目なのかというと、聞いているうちに、あるいは話してい

るうちに興奮してしまう私たちが、各々自由な方にうずくまったり跳ね上がったたりしてしまうもので、イヤホンが裂けてしまうことがしばしばだったのだ。

阿呆な理由だ。

「キヨは、結婚とかしたい？」

方耳でチバががなるのを聞きながら、呟くようにめぐが口にする。

何故か私のほうを見ずに、遠くの寒々しい銀杏の木々を見つめていたのが印象的だった。

「わかんないよ、だって、まだ付き合ったこともないもん」

「まじで？」

「うん、興味ないもん。とりあえずアベがギター弾いているうちはしない。他に目が行く気がしないもん」

「アベと結婚すりゃ良いじゃん」

「あたしにはもったいないもん」

「なんじゃそら」

うははは、と笑うめぐはいつものめぐで、それが返ってさっきまでの寂しげな瞳を私の中で引き立たせた。

その時は、いきなりめぐがそんな話をしたのは、チバのことを思い描いたのだと思っていたが、後になってめぐの両親がその頃離婚していたと聞いたときになって、それが彼女の中に引っかかっていたしこりなのだとわかった。

「めぐはいないの？」

二年近く一緒にいて、私たちはこんなことも知らないほどの奇妙な距離だった。

何せ、めぐが私のフルネームを知ったのだったってつい最近なのだ。でもそんなことを知らなくても、私たちは十分楽しかった。

「・・・いるよ」

正直なところ、意外だった。だって、そんな噂は聞いたことなかったし、一緒になって好きなミュージシャンに悲鳴を上げていた口である。

「え、うちの学校？」

「そう。F組の園田。」

ちょっと視線をそらしためぐが、自分から言ってくれたことも意外だった。私は誰、とかどんな人、とか聞くつもりがなかったし、そんなことを聞くのは私たちの距離には必要のないことだと思っていたのだ。

「初めて聞いた」

「だって、初めて言ったもん」

照れるように笑うめぐは、変な表現だけれど今までで一番高校生っぽくて、可愛らしくて、私は不覚にも始めて誰かを抱きしめてしまいたいと思ったほどだ。

園田は、軽音部でギターを弾いていて、ちょっとした人気者だ。話に寄れば、もう一年近くも前のことで、たまたま同じライブ会場で出くわしてから、仲が良くなって、付き合いだしたらしい。

私は、めぐの日常に、しかも内緒の日常に初めて触れたことが嬉しかったけれど、同時にやきもちを焼いてしまったのも事実で、それから何を口にしていいかわからなかった。

聞きたいようで、これ以上園田のことをめぐの口から聞きたくもない。そんな感じだ。

「でも、チバのが100倍かつこいいけどね」

私の戸惑いを汲んだのか、めぐは茶化すように言っと、傍らでがなつたままのチバと一緒に歌いだした。

それがいつものめぐだったことに、私は自分の子供じみたやきもち

が一人相撲であることに齒がゆさを覚えたけれど、おかげで強がり
を言う余裕が出来た。

「ちゅーしたのかよ」

意地悪く囁く私に、めぐの歌が誤魔化すように大きくなる。

「したのかよこのやろう！」

めぐのわき腹をくすぐりにかかれば、直ぐにげらげらと体をよじつ
て笑うので、結局四代目のイヤホンはお陀仏になってしまい、チバ
の声も途絶えてしまった。

それでもくすぐり続ける私と大笑いするめぐの声に、窓からベラン
ダを覗き込む生徒もいた。一瞬だけ、遠くの窓から園田が見えた気
がしたのは、幻覚だろうか。

「言うから、やめてって！」

その言葉に漸く私がめぐを解放すれば、めぐは涙ぐんだ目を拭いな
ら

「したよ」

と、いともあっさりと言った。言われてしまえば、後はどう話をし
たらいいか困ったのはこっちの方で、考えた拳句。

「どんなだった？」

などと、下世話な問いかけをしてしまった。

「うーん、普通。手にキスするのと変わんないよ」

「ふーん。レモン味？」

やつのことで茶化してみた言葉に、めぐは思いのほか真剣な顔を
していた。

「人間の味。……うーんなんていったら良いかな。ああ、他の人
間ってこんななんだ、ってわかるような。うん……人間の味って
言うのがしっくるくるかな」

「……人間の味って……グロテスクだね」

「・・・確かに」

そういっためぐはもう笑っていて、だから私はもうそれ以上園田の事について聞くのはやめた。

園田とめぐが別れたのはその五カ月後、私がめぐから聞いたのはその更に二カ月後だった。

一緒に暮らそう

何で園田と別れたのかは、聞かなかった。

でも、余りにも普通にめぐが「実は4月に園田と別れたんだよ」と2ヶ月のビハインドの末に言うので、聞こうにも聞けない雰囲気だったのだ。

思い出して言ったというには大事なことだと思うし、二ヶ月置いてなお言おうと思ったための気持ちがどうであつたか、細かく察しはつかなかったけれど、二ヶ月を要したことがそれを表していた。

高校生活が終わるまで、めぐはそれから誰とも付き合わなかった。付き合わなかったのだと思う。少なくとも私は聞かなかったから。

「結婚式、いつするの？」

「来年の3月」

めぐが窓に向かって吐き出した煙が、夜風に煽られて桜の花の中へと吸い込まれていく。

街道沿いのこのマンションからは、道沿いに植えられた桜がベランダに降りかかるかと思うほどに近くで見物できた。

この桜を今年はまさかこんなに寂しい気持ちで見るとは予想していなかった。

「結構遠いね」

「うん、でも準備とかが結構大変みたいでさ」

「ふうん」

「そう、大変なんだって」

お互いにぼろぼろとこぼすような言葉のやり取りは、きつとめぐも気づいているだろうが、不自然だ。落ち着いて見せても、私の心は今のところどこに落ち着いたらいいかわからずに、手にしていた煙草の灰がこぼれそうになっているのに気づけず、カーペットを汚してしまった。

「で、ここにはいつまでいられるの？田坂のところに行くの？それとも実家？」

きつと、めぐが切り出したかったのはこのことだったろう。彼女がさつきから微妙に上の空で何か言葉を探しているのはわかっていた。私の出した船に、めぐは眉を下げて乗り込むと煙草の火を消して座りなおした。

「うん、夏前にはね、田坂と一緒に住もうと思って。勝手を言っでごめん。まだ、予定なんだけどね。」

私を氣遣った言葉はありがたかったけれど、でもそれが返ってめぐの本心を表しているようで切なかった。まるで他人みたいなよそよそしさじゃないか。

「うん、良いよ。めでたいことで引越すなら、私だって願ってもないことだよ。私もね、そろそろ実家に帰ろうかと思ってたんだ。だから、いつでも良いよ」

「え、実家に？」

思いがけない言葉だったのだろう、面白いほどにめぐの目は驚きの色を濃く表していた。

だけど実は、これはただの強がりだ。帰ろうかと思ったんじゃない、帰るしかないのだ。

それほどに私は自分の生活能力のなさを熟知しているつもりだし、今までの生活らしい生活は、めぐあつてのものだった。

と、言うのも建前で、本当は一人の暮らしなど、想像しただけでも心細くてごめん被りたいのだ。でも、そんなことを言ったところでめぐを困らせるだけなので、私はあたかも前々から決めていたように口にした。

「お母さんも寂しがってるしね。ほら、私心配ばっかかけてるじゃん？」

笑いかけたところで、めぐは心配そうに私を見つめるだけだ。もしかしたら私の考えは顔に出るほど見え見えなのだろうか。

「今までは、めぐと一緒にだからまだ安心してもらえたかもしれないけどさ、一人暮らしなんて、きつとお母さんが毎週末くるだろうか、実家に帰るのも変わんないし。」

実際、うちの母親は私よりもめぐの方を信用しているんじゃないかと思うほどで、めぐと一緒にだといえは多少の朝帰りも全く怒られなかったし、こうして実家を出るのもさほど文句を言われなかった。

そういえば、一緒に住もうといってくれたのはめぐだった。

高校三年の冬、奇しくも同じ東京の短大に通うことになっていたことが判明した私たちは、何故か何の迷いもなく、本当にただの思いつきで一緒に住もうとしてしまったのだ。

めぐ曰く「部屋で音楽を聴けば、これ以上イヤホンを壊さなくて済むじゃん」とのことだった。親にとつても、どうせ娘を上京させるなら、一人よりも二人の方が安心するだろうとそれほど心配もしていなかった。

早速親を説得しようと、その時初めて私とめぐは連絡先というものを交換したというのは、今考えてもおかしななしだ。

そして土曜日になって、めぐはまるで彼女の親にご挨拶に行くような勇ましさで私の家にやってきた。

落ち着かなかったのは私のほうで、隣でお母さんを懇々と説き伏せるめぐの話はちつとも覚えていないし、自分が何かを口に出した記憶もない。気がついたらめぐとお母さんが楽しそうにお茶を飲み交わしていたことだった。

「キヨさんを下さい！って言うちゃうところだった」

駅まで送る帰り道でめぐは、いつものように「うははは」と笑いながら伸びをした。めぐもめぐで緊張していたのだろう。

「彼氏を親に紹介するってどんな感じがわかった気がするよ」

「でも、キヨの彼氏はいいね、キヨママ優しいもん。娘の彼氏でも絶対仲良くしてくれる気がする。」

「そうかなあ。っていうか、私は行かなくていいの？めぐの所。」

「うん、平気。うちは放任主義なのよ。それにキヨなら合わせた瞬間にOK出ると思うし。・・・ごめんね、一緒にこれなくて。どうしても仕事が抜けられないみたいで。引越しの時にはちゃんとお父さんと挨拶するから。」

「ううん、それはいいんだけど。うちも今日お父さん仕事になっちゃったし。」

さつき、めぐは同じことを私のお母さんに散々謝っていた。

めぐの家庭の詳しいことは知らなかったけれど、離婚した拳句に放任主義という言葉聞いて、私は勝手に一人合点して妙な使命感でいっぱいになり始めていた。

ありがちな冷めた家庭というものを失礼にも想像して、めぐを守ってあげられるのは私だなんていうトンチンカンな発想をしてしまった。

嫁にもらう気分だったのは、私のほうだった。

私が自分のトンチンカンに気がついたのは、引越しの当日だった。

現れためぐのお父さんは、いかにも職人肌の気難しそうな人だったけれど、手土産を私の母に持ってきてくれた。そりやもう何度言っただかわからないくらいに私に「めぐみをよろしくお願いします」と頭を下げ、ばつが悪そうに苦笑いを浮かべるめぐみに小突かれているお父さんを見て、彼女の言う「放任主義」が彼女の強引さで成り立っているのを知った。

そういえば、田坂はめぐのお父さんに少し似ている。そんなことを言ったらめぐはものすごく怒るだろうけど。

田坂とキヨ

高校の同級生は、私とめぐが同居することにそれほどにもかと思うほどに驚いていた。

私たちが昼休みだけ共有する間柄だと知っている友人たちには、何度か再考を提案された。

良く知りもしないのに一緒に暮らして上手くいくわけがないと、入学した頃からの付き合いである慶子には何度となく諭されたけれど、正直言っても一緒にいた慶子の四角四面の物言いなんかの方がずっと私の生活には向かないと思った。

それが悪いわけじゃない。慶子は向き合うべき素晴らしい友人だと思える。だけど、私とめぐは違った。

上手く形容は出来ないけれど、いつだって二人が同じ方向を向いているような、そんな感じがするのだ。

そして、現に二人の生活は思った以上に快適だった。もしかしたら私の一方的な感情かもしれないけれど、不安がなかったといえば嘘になる私が、両腕をおっぴろげて寝られるようなおおらかさだった。

お互い自由に講義をとっていたこともあって、行き来が一緒になることもなかったから、大学の友達も私たちが一緒に住んでいるというのを聞くと意外だと口を揃えた。

ならば前と精神的な距離が縮まったのかと言われれば、特段そんな気もしない。ただ、一緒にいる時間は多少増えた気がするだけだ。

一緒にいる時間といってもするのは前と同じようなバカ話だし、大概は同じ部屋で音楽を掛けながら私がゲームをやっていて、傍らでめぐがレポートを書いているという風に、一緒に暮らす前に言った「イヤホンが壊れない」程度の生活だった。

だけど、少なくとも私にはそれが快適だった。

どちらかに恋人が出来たりしても、私は恋人を自分の生活に引き込むことはしなかったし、私にとってはめぐの恋人はめぐの前を流れていく人に過ぎなかったから、わかれると聞いてもそれについてどうこう言う事もなかったし、めぐもめぐで事後報告をするほうが多かった。めぐもそうだった。

誤解を受けるといけないと思うから言うのだけれど、私は自分の恋人に壁を作っていたわけじゃない。ただ、私にとって二人の生活はすっぴんよりも丸裸で、血管を取り出して血の流れを見せるような気持ちだったのだ。

そうそう、あるいは母の裸を他人に見られるような気分にも似ているかもしれない。

とにかくそんな感じに、私たちは過ごしてきた。短大を卒業して社会人になってからもそんな生活は当たり前のように続いていた。

微妙にそれが変わっていったのは、めぐが田坂と付き合い始めた頃だった。

私はどういうわけか、めぐが誰と付き合っても、その恋人と私が一生の付き合いになるとは思えなかった。おかしい話だけれど、めぐの人生はいつだって私の見えるところにある気がしてならず、つまりは私の人生にこの恋人が干渉することなどありえないと思っていた。

社会人も七年目になった春に、田坂という人と付き合っていると打ち明けられたときも、私にとってはいつもと同じめぐのただの恋人だった。

初めてめぐに連れられてきた田坂は、いかにも体温の低そうな気だ

るげな面持ちで、私にあったからといって愛想を良くする様なタイプでもなく、どちらかというと私などに余り興味がなさそうだった。会社の友人の知り合いに紹介してもらったとか言う説明をめぐにされても「どうも」と一度頭を下げたきりで、何だかこっちの方が気を遣ってしまっただけいつもより饒舌にさせられてしまい、田坂が帰った後めぐが私を心配したほどだ。

何度会っても、田坂には中々慣れなかった。今までめぐの彼氏を気にすることのなかった私なのに、どうしたって居心地の悪さが拭えない。要するに、苦手だということだ。

めぐがコンビニなんかに出かけて、部屋に二人きりにされるともうだめで、それとなく電話をするように装って自分の部屋に逃げたり、お風呂に入ったりして誤魔化していた。

向こうもそれを察しているのか、それとも極度の鈍感なのか、私に干渉することはなかったから、それについては気を遣うことがなくてほっとした。

ただ、めぐが私に田坂を会わせることに遠慮がなかったので、きっと田坂は私が田坂から逃げているということを伝えたりすることはなかったのだと思う。

「大内さん」

だから、あの日めぐがなくなったボディーパープを買いに出かけた後、突然話しかけられたときには肩を跳ね上げるほどに驚いた。

「何？」

きつと私の声は微妙に上ずっていたに違いない。

「俺のこと、苦手でしょ」

めぐと田坂が付き合い始めて一年、私と初めて会ってからと同じような時間が過ぎていたが、今更何を言うのだろつと呆氣にとられ、返す言葉がなかった。

「図星だ」

僅かに笑つと田坂は缶ビールのプルタブを引き上げて私に差し出した。

「何でそんなこと思うのよ」

「否定しないんだ」

いつもとは逆方向に私の気持ちを察していく田坂からビールを受け取ることもなく、私は飲みかけのペットボトルのふたを開けてお茶を流し込んだ。残り少ないお茶だったけれど一気飲みする必要はなかったはずなのに、田坂のただ一言で私の口の中はカラカラと渴きを訴えていた。

田坂は差し出したビールを引き戻してそのまま口をつけると、喉の出っ張りを二三往復させる。

「いや、大内さんさ、俺がいると避けるでしょ」

「誤解だよ。だって、友達の彼氏と仲良くするなんて必要もないかなあと思つてさ。変に勘違いさせるわけにいかないじゃん」

「それだけ？」

「それだけ」

「ふうん」

失敗した。話すごとにカラカラと口ばかりか喉も渴いていくのに、無計画にお茶を飲み干したせいで、見透かしたように笑みを浮かべる田坂への苛立ちを誤魔化すことが出来なかった。

田坂とキヨ2

「嫌われてんのかなあって、俺。初めて会ったときからすっげえ顔で睨んでたからさ、大内さん」

「睨んでないよ」

「ちなみに今話しかけたときも睨んでたよ、俺のこと」

心当たりのない言いがかりに、顔をしかめそうになるけれど、それでまた睨んでいるだなんていわれてはたまらないので、不本意ながらも私は平静を装っていた。

「そんなつもりはないから、誤解だよ。私、元々目つき悪いし」

「うん、それはわかる」

遠慮なく人のウィークポイントを突くのは、全く田坂らしいやり方で、言った自分がバカだったと後悔させられた。

しかし、確かに私は田坂が苦手だけれど、だからといって別に嫌いというほどではなかったし、いくらなんでも人を睨みつけるだなんて不躰な行為をあからさまにするほど子供でもないつもりでいる。だとしたら、田坂は一体私の何を見てそう思ったのだろうと省みても、一向に見当はつかなかった。

「めぐと大内さんってさ、仲良いよね。高校からだっけ。」

私が段々と眉間に難しくしわを寄せていくのを見かねたのか、田坂は話題を徐に変えた。

中途半端に形成されたしわに、言いがかりの危険を感じた私は直ぐにそれを緩めると田坂の視線に答えた。

「そうだよ。」

相手の意図が見えない以上そう答えるだけしか出来ない。

「めぐの裸、見たことある？」

「は？」

唐突な質問に、私は思わず素っ頓狂な声を上げた。
しかし田坂は笑うでもなく、そう、初めて会ったときのあの体温を感じないような表情で意味のわからない質問を続けた。

「アイツが大声で泣くの、見たことある？こないだイライラしてコップ投げつけて割ったの、知ってる？」

「田坂、何いってんの？」

問いかけたところで、田坂の表情は微動だにしない。
握っていたペットボトルと手の間に汗がにじんで、まるで私の体の一部かのように引っ付いてくる。

「俺の元カノの写真、部屋で見つけて破いたの知ってる？元カレの・
・園田だっけ？そいつが最近までしつこくめぐの仕事先に來てたの知ってる？」

そいつと別れた原因がめぐの浮気だっていうのとか。」

次々と突きつけられていく言葉に射止められたように、私は微動だにできなかった。

田坂が何を目的としているのかはさっぱりわからなかったけれど、晒されて行く私の知らないめぐに出くわすたびに私の呼吸は、酸素を奪われたように荒くなっていた。

「アイツがセックスのときどんな声出すか知ってる？」

その言葉にはじかれるように勢い良く立ち上がると、私は気づけば手にしたペットボトルを田坂に投げつけていた。

「田坂、何が言いたいのか」

声が異常に震えているのは自分でわかっていた。握り締めた手の、指先が異様に冷たい。

「だから、俺の事だいつ嫌いでしょ、大内さん」

私の怒りに動揺することなく、むしろ薄く笑った田坂は跳ね返って壁際に落ちたペットボトルを拾いに行く、キッチンのゴミ箱に捨てた。

「俺のことだいつ嫌いつていうか・・・」

キッチンで私に背を向けたまま田坂は言葉を続けた。言いよんだ先で何を言おうとしているのか、背中からは測れない。

私が気に掛けていることなんてお構いなしに、田坂はゆっくりと二つのコップに水を入ると、戻って片方を私の前に置いた。

本当ならば、今すぐ飲み干してしまいたいくらいに喉はカラカラなのだけれど、田坂が持ってきたというだけでそのコップには触れることさえもしたくなかった。

それを感じてか、田坂は私の目の前でわざとらしく水を飲み干した。そしてその薄い唇で、言いよんだ言葉をはっきりと言い放つ。

「めぐのことがだいつ嫌いなんだよね？」

田坂とキヨ 3

田坂は何を言っているのだろう。どこをどう解釈したらそんな結論に達するのだろう。

理解できない言葉が頭の中をものすごい勢いで旋回していく。反論よりも絶句が勝って、私はもうお構いなしに眉間にしわを寄せて田坂をじっと見ていた。

「どこで何しようとか渉しないなんて、女の子にとっちゃ大人で格好いいのかもしれないけどさ、めぐは実際そう思ってるのかもしれないけど、大内さんは違うよね。」

めぐが知らないところで何してるのか知るのが怖いんだよ。」

「意味がわかんない」

「だろうね」

一々癪に障る返し方をするものと、感心すらしてしまう。田坂はさも余裕ありげに手を伸ばして窓を開けると、煙草を取り出して火をつけ、私にも一本差し出した。

「いらない」

窓から、むっとした草いきれの匂いが風に乗ってやってくる。突然やってきた暖かい空気のせいで、冷房で冷え切っていた体が湿気を帯び始めるのが不快だった。

「気づいてないっばいもんね、大内さん。」

その余裕ぶった話し振りが心をささくれ立てていく。こんな話し方をする奴だったろうか。

思ってみても考える余裕がなくて、脊髓反射のように言葉を投げつける。

「なにが」

私の声にも段々と苛立ちがこもっていた。気づいた田坂は萎縮するどころか煙草の煙を深く吸い込んで吐き出して、その流れを目で追っていた。

「大好きでしょ、めぐのこと」

出された一言に、益々田坂の考えがわからなくなった。からかつているとしても、趣味のいいものじゃない。

苛立ちを通り越して、妙な夢を見ているような気分だ。だって、田坂はこんなに私と話す奴じゃない。今まで一度だって仲良くお話ししたことなんてない。冷や汗が手の中ににじむ。

「大好きじゃん。」

すっかりと眉間のしわを緩め、奇妙な生き物を見でもしたように目を見開いたままで固まる私に、田坂は追い詰めるような視線を投げつける。

脳みそが振り回されて、私はにわかに視線が定めることが困難だった。

「まるで自分の彼女にこれ以上近寄るなって言ってるみたいだよ、田坂さん。」

最初は、俺のことが嫌いなのかと思った。田坂っていう奴が嫌いなんかって。」

一息分大きく煙を吸うと、田坂はろくに吸っていない煙草をもみ消した。

「でもそうじゃないよね、大内さんはめぐの彼氏が嫌いなんですよ？大内さんはめぐが好きなんだよ。」

「・・・好きだよ、それがどうかしたの」

やつのことと言葉を搾り出すと、田坂は言葉を搜しているのか目をゆっくりと泳がせながら首の後ろをさする。吐き出す息がぶれて、下唇が震えた。

消しきれていなかった煙草を、田坂は再び灰皿に押し付ける。
めぐはまだ帰ってこないのだろうか。
コンビニはこんなにも遠かっただろうか。

「それ、普通じゃないよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8714k/>

バイバイ・ベイビー

2011年10月5日23時43分発行